



Title	スタンスから見る「なんか」の機能：『日本語日常会話コーパス』を使用して
Author(s)	肖, 潔
Citation	言語科学研究, 1, 81-93
Issue Date	2024-03-29
DOI	10.14943/110404
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91817
Type	article
File Information	1_07-SHO.pdf



[Instructions for use](#)

スタンスから見る「なんか」の機能

—『日本語日常会話コーパス』を使用して—¹

肖 潔

1. はじめに

「なんか」のような談話標識（「語用論的標識」とも呼ぶ）は、話し手の心的態度を表すほかに、聞き手への配慮を表す役割ももっている。このような配慮は、発言しにくい内容や相手のメンツをつぶすような内容を、聞き手が受け止めやすいようにしている。この点から言うと、配慮の機能は会話を滑らかにする交感機能とはある程度重なるところがある。配慮によって、話者と聴者是对立にならずに会話を進めることができる。また、対立するかどうかは話者の立場を指すものであり、「スタンス」(Du Bois, 2007) を表しているのである。「スタンス」は、デュボアの 'The stance triangle' という論文からきている用語である (Du Bois, 2007)。「姿勢をとる」(taking a stance) という言い方もあるが、会話において、話し手は常にある事物・対象に対して評定し (evaluate)、自分の立ち位置を決め (position)、聞き手との立場を揃える (align) ことを指す (ibid: 163)。「なんか」は、助詞・副助詞および談話標識として議論されているが、談話標識として扱われるとき、このようなスタンスの視点から考察することはあまり見られない。「なんか」は、どのように相手との立場を揃え、交感機能を果たしているのか。スタンスによる分析は、配慮に対する認識を具体化するのに新しい視点を付与する可能性がある。

本研究では、交感機能との関連性を議論したうえで、スタンスの視点から「なんか」の機能を考察することを試みる。考察用例は『日本語日常会話コーパス』の中にある会話の文頭・文中・文末における談話標識「なんか」の会話文を用いる。

2. 先行研究

Schiffrin (1987: 31-41) によれば、談話標識は、括弧 (bracket) のように話の単位 (units of talk) の前後に存在し、その語の前後に連なっている談話の連鎖に依拠する要素である (oh, well, and, but, or, so, because, now, then, I mean, y' know がその例である)。話の単位とは、音調単位 (tone units)、発話、文、節、談話など様々なものがある (ibid: 31-41)。さらに、談話標識は、「談話上の目印」(加藤 2004: 218) であり、「たぶん」「やっぱり」はその例で情報に関するメタレベルの情報を提示しており、情報に付けるタグに記載されるメタ情報の一部を明示する機能をもっているのである (ibid: 219-220)。そのほか、談話標識は、話し手が自分の意図や認識をほかの会話参加者 (聞き手) に知らせ、話し手の発話がどの程度確かなのか、その証拠性、認識性などで話し手の心的態度 (モダリティ) を表示していると述べる研究者もいる (小野寺

¹ 本稿は、2022年度に北海道大学文学院に提出した博士学位論文の中にある一部の内容をもとにし、多少修正したものです。ご指導くださった加藤重広先生には大変感謝しております。そして、本稿の執筆にあたり、本誌査読の2名の先生より多くのご教示を頂戴いたしました。ここに記して御礼を申し上げます。

2020 : 177)。

また、談話標識「なんか」に関する研究は、Saito (1992)、飯尾 (2006)、ルカムト (2012)、平本 (2011)、楊 (2017) などが挙げられる。その中でも本研究の論点に関わるものとして、「なんか」における主な機能は、会話を和らげる (softener)、つなぎ語 (filler)、発話権の獲得 (turn initiator) である (飯尾 2006 : 9-10)。

このように、談話標識の「なんか」は交感機能のような会話の雰囲気や和らげる機能をもつことが察知できる。しかし、文頭・文中・文末における「なんか」がそれぞれどのように振る舞っているのか、どのように姿勢をとりながら話者同士との会話を促進しているのかという点については、スタンスの視点から見たことはない。

「なんか」は、談話標識として作用する際、名詞に限らず、発話や節などと連なって表れることが多くみられる。本研究は、発話頭・発話末・発話中 (発話・節・文・句などにつく) における談話標識の「なんか」に着目して考察を行う。そして、ヤーコブソンの言語伝達行為における話し手と聞き手の物理的・心理的「接触」(contact) の要素から拡張的交感機能をとらえ、談話標識「なんか」がいかんして会話参加者の心理的接触において役に立っているのかを考察する。また、「スタンス」(姿勢・立場) の観点から日常会話における「なんか」がどのようにして交感機能を果たしているのかも検討していく。

3. 拡張的交感機能

「交感機能」という用語が Malinowski (1923) の phatic communion からきていることは言うまでもない。Malinowski (1923 : 149) によると、交感的表現は、健康についての伺い、天気についてのコメント、物事の極めて明らかな状態に対して確認するような話題を交わす際に用いられるものである。そして、発話の目的は「共同の感情を確立する」(ibid.) ことである。例えば、How do you do? Ah, here you are. Where do you come from? Nice day today (Malinowski, 1923 : 150) のようなあいさつの決まり文句がある。このような発話のもつ作用が、これまでの研究において交感機能とされている。

また、Jakobson (1960 : 3-7) は、言語伝達行為の6要素における「接触」(contact) という要素に対応する機能は「交感的」(phatic) 機能であると述べている。この接触とは、伝達行為が成立するための条件であり、話し手と聞き手の物理的および心理的接触を指す。

ヤーコブソンの主張を踏まえると、交感機能は、話し手と聞き手の物理的・心理的接触に重点を置いて作用を果たすものである。マリノフスキーによって提示されたあいさつの決まり文句は情報内容があまりないものであるが、話し手と聞き手が言い交わすことによって心理的接触を深めることができるので、交感機能を果たすものと言え、これまでの研究で言われている典型的な交感発話である。また、話し手と聞き手の心理的接触が進むことによって、両者のコミュニケーションも融合し、ますます一体化していくことが予測できる。まさに Firth (1964 : 112) が述べているように、phatic communion (交感的言語使用) は基調 (keys) や雰囲気 (moods) を重要視するものである。この雰囲気とは、話し手と聞き手との間で交わされるコミュニケーションの環境を指している。コミュニケーションの環境が穏やかもしくは和やかである場合、交流にぎこちなさを感じることなく進めることができる。

よって、交感機能をヤーコブソンの言語伝達行動の6機能の1つとして位置付けられる理由は、人間同士のコミュニケーションに話者同士の物理的回路と心理的接触が不可欠なためである。Jakobson (1960) も述べているように、コミュニケーションにおけるいくつかの機能の存在は階層的になっている。「1つの機能しか果たさないような言語メッセージはない。ある機能

が多くのメッセージの主要任務であるとしても、そのようなメッセージにおける他の諸機能の付随的参画も見逃してはならない」(Jakobson, 1960: 3-4)。よって、交感機能は6機能の1つとして、ほかの機能と並んで存在することがあると考えられる。また、機能負担量の観点からみると、交感機能が強い場合（もしくは、交感機能を主として働かせたい場合）には、言語の機能体系が新しい均衡を求めて変異を起こし、ほかの機能が相応的に弱くなることが考えられる。コミュニケーションにおいては、情報の伝達をする際に、聞き手にうまく意見を受け止めてもらう（もしくは、話を聞いてもらう）ように、交感機能の作用も合わせて考慮する必要がある。

したがって、情報伝達だけをするコミュニケーションもあれば、情報伝達の際に、聞き手との心理的接触を考慮しながらのコミュニケーションもある。さらに、あいさつのように、情報伝達せずに、単なる交感発話をもって交感的交流をする行為も存在する。なお、ここでの情報伝達は、依頼・要求・伝えるべき内容があるものなど幅広く含まれている。この3つの状況における交感機能の強さもそれぞれ変わってくるのである。下記図1のように示す。

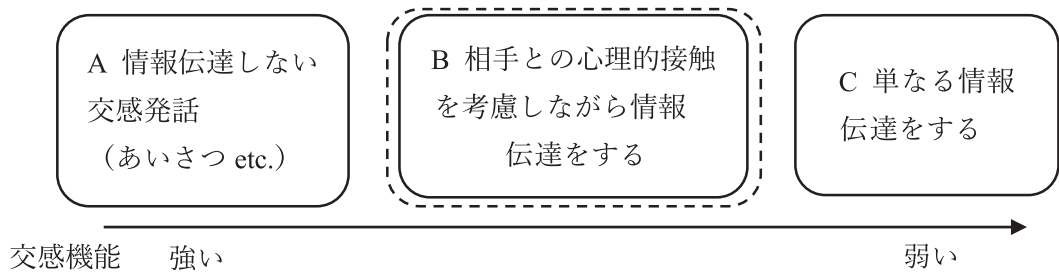


図1. 交感機能の強さの変化

従来、交感機能と言えば、図1に示されているAの状況だけが注目され、Bの状況における交感機能は指摘もほとんどなされることはなかった。本研究では、Bの状況に重点を置き、従来の交感機能から逸脱している部分を見ていきたい。具体的にいうと、聞き手とのコミュニケーションにおいて、情報伝達している際に、ぎこちない雰囲気にならないように環境を整備することがある。このような環境の整備は、会話の開始時と終結時にあいさつを交わすときのみに限らず、会話中においても不可欠である。例えば、発話時に相手の気持ちに配慮して適切な言葉を選択したり、長時間におよぶ用件の相談で疲れたときに頃合いを見て話題を脱線させたり、適宜な話題の切り替えや発話のテクニック（共鳴を引き起こす同調発話など）によって会話のクライマックスに至るなど、さまざまな場面で会話の環境（雰囲気）を整えているのがみられる。これらは、多かれ少なかれメタレベルにおいて交感機能の役割を果たしているのである。言い換えると、会話開始時と終結時のあいさつは交感機能を果たすことを主要な目的として存在するものであるが、会話中の情報伝達の際に穏やかな会話環境を確保するためにメタ的に交感機能を果たしているものもある。前者の機能が従来の典型的交感機能であるなら、後者の機能はそこから逸脱した「拡張的交感機能」と言える。本研究は、談話標識「なんか」の考察を通してその「拡張的交感機能」を捉えていく。

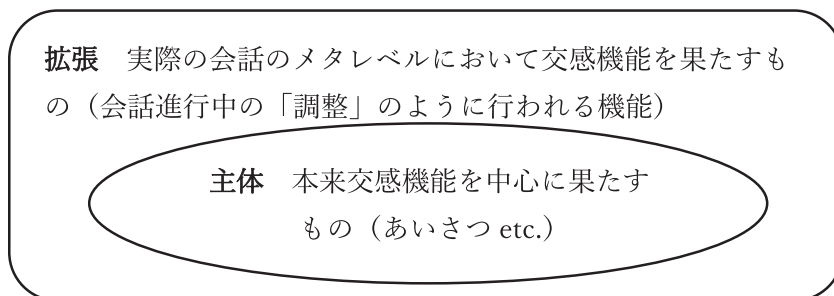


図2. 拡張的交感機能

4. 事例考察

先行研究の節でもふれたように、Schiffrin (1987) によれば、談話標識は「括弧 (bracket) のように話の単位 (units of talk) の前後に存在する」(Schiffrin, 1987: 31-41) ものである。話の単位には、音調単位から談話まで様々な形が含まれている。談話標識「なんか」の特徴をとらえるために、発話頭・発話末・発話中に出現したものに着目して考察を行う。本節では、日常会話を中心に調査する。日常会話については、『日本語日常会話コーパス』(以下、CEJC) を使用する。

4.1 文末の「なんか」について

(5) 「T006_004」(抜粋)

((飲食店で大学の先生2人・後輩2人と授業の打上げ、青木と尾形は先生のティーチング・アシスタントである。))

01 IC03_青木 パチ パチ屋あるじゃないっすか：＝

02 IC01_尾形 ＝うん。

03→IC03_青木 あれ (0.3) グレーゾーンついてるんすか。なんか。

04 IC01_尾形 (0.2) うん？。

05 IC03_青木 (0.4) 景品。

06 IC01_尾形 あっ。あ。あー あー。三店方式だっけ？。

07 IC03_青木 はい はい はい はい。

(5) は、尾形が青木に図書券や商品券の換金の話をしているとき、青木が、換金に関連して、パチンコ屋では謎の棒を景品として出していて、近くにたまたま現金で買い取ってくれる店があるが、パチンコ屋はその引換や引換所とは無関係で、責任は取らないという話題を持ち出している、というものである。青木は、パチンコ屋にも同じような換金の話があるという話題を提示するとき、最初は、「パチ パチ屋あるじゃないっすか：」(01) と言って話を切り出してから、「あれ (0.3) グレーゾーンついてるんすか。なんか。」(03) と相手に確認をしている。

ここで付加された「なんか」は、2つの側面から分析できる。まず、話し手の立場から分析すると、「パチンコ屋の景品引換はグレーゾーンがある」という主張は、あくまでも個人の判断によって下した主観的な意見であり、不確実性があることを示している。疑問文にしている理由はまさに不確実性があるからである。「自分の認識は間違っている可能性がある」という謙虚な態度を「なんか」で示している。つまり、「なんか」の使用には話し手の戸惑い(情報内容の正しさに関して)が含まれているが、聞き手に対しては自分の認識が正しいかどうか、その回答や同

感を求めるために「疑問文+なんか」の形をとっている。また、「グレーゾーン」は明らかに違法ではないが、合法とも言えず、法律に触れる可能性があるということであるため、好ましい話ではない。このような扱いが難しい話に対しては、コメントするのも慎重になり、表立って何かを指摘する際には責任が生じる恐れがある。よって、「なんか」は、「なんかそういう感じがする」などの文が省略されたともとらえられる。単刀直入に複雑な話題を提示するのは妥当性を欠いていると考え、「なんか」を発話末に付け、気まずい雰囲気を緩和することができるように調整しているのである。

次に、聞き手との関与の面から分析する。「グレーゾーンついてるんすか」という質問は疑問文で、相手に何らかの回答を求めるものである。とりわけ、「ノダ」をつけると、聞き手に詰問する意味合いが含まれるため、一種の攻撃性がある。聞かれた側は答えなければならないため、聞き手にとって、そのような回答要求は負担である。また、パチンコ屋における景品の引換に関する話については、聞き手は直接の関係者ではないため、回答の義務をもっていないはずである。このような相手が回答義務をもたない質問に、相手に不愉快を感じさせずに回答してもらうには、なるべく発話の口調を和らげる必要がある。そのため、「なんか」を発話末に付加し、相手に対する強い攻撃性を弱めているのである。つまり、「グレーゾーンついてるんすか」という疑問文だけでは聞き手との心理的接触への配慮がないため、「なんか」を付けることによって、「グレーゾーンついてるんすか」に「なんかそう思っていますが」という意味が付加され、発話全体の雰囲気が柔らかくなるのである。このようになるのは、「なんか」が「なにか」という不明確・不明瞭・概数といった語彙の意味をもったものから現在の談話標識にまで発展してきたからであろう。「なんか」は談話標識として付加されたときにも発話に曖昧性を付与している。曖昧性は日本語の運用にみられる特徴であり、曖昧さによって発話の鋭さを軽減するのである。要するに、「なんか」を付与することによって、疑問文で発話を終了することなく、言いさし文に切り替え、聞き手への負担を軽減しているのである。

このことはまた、「順番交替のシステム」(Sacks, Schegloff and Jefferson, 1974) から分析することもできる。順番交替は、会話という活動にみられる「原動装置」である。現在の発話が最初の「順番構成単位 (turn constructional unit)」の完結可能な点、すなわち、最初の「順番の移行が適切となる場所 (transition relevance place)」に至ったとき、もし現在の話し手が次の話し手を指定しているならば、次の話し手は発話の順番を取る権利と義務を有する。これを順番が替わる (ibid.) という。「グレーゾーンついてるんすか」という疑問文で終了すると、聞き手はその次の順番を取らなければならず、負担が大きくなる。しかし、「なんか」を付けることにより、聞き手は次の順番を取らずに、発話権を現在の話し手のところに一時的に保留しておいてもよい場合、会話の進捗に影響を及ぼさない。発話権を取るかどうかは、聞き手の判断次第であり、聞き手の自由が狭められていないため、ネガティブ・フェイスが守られるととらえられる。聞き手の負担が小さくなるのみならず、話し手も会話の主導権を握ることができ、間が現れたり聞き手が答えなかったりすれば、話し続けてよいのである。このように、「なんか」を付加してさりげなく話しかけることにより、話し手は会話の進捗をコントロールでき、聞き手も負担や責任を感じずに自由に返答することができるのである。

上記の分析を下記のようにまとめることができる。

表1. 文末の「なんか」について

話者の立場	スタンスとその作用
話し手自身	①個人の主観的意見で、不確実性があることを示す謙虚な態度。
	②扱いにくい話題には単刀直入ではなく、言葉をぼかして責任生じないように触れる。
	③疑問文は攻撃性があるため、「なんか」というあいまい性のある言葉を文末に付け、発話全体の雰囲気をもたらしやすくする。
	④話し手は会話の主導権を握ることができ、間合いが現れるときや聞き手が答えられないときに発話権を保留することができる。
聞き手との関与	疑問文とした場合、聞き手に次の発話の順番を取らなければならないような負担をもたせている。「なんか」の言いさし文は、聞き手への負担が弱まり、ネガティブ・ポライトネスにつながる。

4. 2 文頭の「なんか」について

(5) は「なんか」を文末に付けた場合の例であったが、次に、文頭に付けた「なんか」の例を考察する。

(6) [K004 __ 013] (抜粋)

((職場の絵本専門店での先輩スタッフ4名と一緒に店に入れる本を選ぶ定例の会議。))

- 01 N10A_長尾 えー。井上洋介さん？。
- 02 IC03_篠崎 (02) [うん。
- 03 IC02_佐和 [(そう | そ) [そう。
- 04 N10A_長尾 [遺作って [こと？。
- 05 IC04_米山 [うーん。
- 06 IC02_佐和 こないだ亡くなったからね =
- 07→IC03_篠崎 =なんか最後 [だから：。
- 08 IC04_米山 [うん [うん。
- 09 IC02_佐和 [うん うーん。

(6) は、絵本専門店のスタッフが一緒に絵本を選定している場面である。「井上洋介」という作家の名前が挙がり、最近亡くなったことや、遺作であるかどうかという話をしている。ここでは、篠崎の「最後だから」(07) という発言の頭に「なんか」が付いている。

話し手の立場からみると、「最後だから」とだけ言うと、「だから」により「上から目線」で聞き手にものを言っているようにとらえられる。つまり、話し手が断固として意見を主張することになり、聞き手に押し付けがましい態度を見せることになるのである。しかし、「なんか」を文頭に付けると、「よくわからないが、大まかな感じ、押し付けていない」という発話の「スタンス」を示すことができる。ここでの「なんか」は一見すると話者の確信の度合いが低いことを表しているようであるが、前の話し手による「遺作ってこと？」(04)、「こないだ亡くなったからね」(06) という発言を考慮に入れると、「最後の作品」ということは話者本人もある程度確信しているはずである。あえて「なんか」を文頭に付けるのは、誠実な使い方ではないが、文末の「だから」の強い口調を緩和するための戦略的な使い方とも言えるわけである。それによって、「上から目線」の印象も弱められる。それだけではなく、「はっきり言えない」という態度で自分の意見を主張するという「角を丸くした」発話のほうが、相手には受け入れられやすい。「はっ

きり言えないが、あえて言うとかんな理由だろう」という優位性を示さない、威圧的な態度を取らないスタンスを示している。よって、「なんか」は場の空気を柔らかくする機能をもっているともいえる。

文頭の「なんか」は、話し手が発話の内容(ある事物対象)に対して自分の立ち位置は「よくわからないが、あえて言うとかんなことだろう」とマークしているのである。このようなスタンスは、まさに前の話し手との立場を揃えるためである。次に、聞き手との関与から見てみよう。

聞き手との関与からみる場合、「なんか」の使用は前の話し手の発話文と呼応していると言える。会話を見ると分かるように、「=なんか最後だから:」という発話は、前の文「こないだ亡くなったからね=」(06)と緊密につながっている。前の話し手が使用している終助詞「ネ」は、ほかの話し手に同感を求めるものであるが、ほかの話し手が話者の意見を受容せずに疑念を示す余地を認めることも示すマーカーである。つまり、排他的ではない立場を示している。このようなネが用いられた他者の異議を許容するような会話場面(ネが示した立場)においては、会話が捗るように、次の話し手も前の話し手と同じような立場に立つ。次の話し手のこの立場は、まさに文頭の「なんか」によって表されているのである。前述したように、「なんか」は「大まかな感じ」という発話の態度を表示している。話し手は自分の意見をはっきり主張したいものの、あえて確信の度合いが低いことを示す「なんか」を用いている。「自分の考えは客観的な根拠をもってないが、何となくそういう感じ」という発話の態度を示すことによって、「ネ」で終了した前の発話文と呼応させている。言い換えると、文頭の「なんか」は、前文の終助詞の「ネ」と同じように、「自分の意見はこうであるが、ほかの話し手によって変える余地がある」という排他的ではない発話の立場を表示しているのである。

上記の分析を下記表2のようにまとめることができる。

表2. 文頭の「なんか」について

話者の立場	スタンスとその作用
話し手自身	①文末の強い口調を緩和し、会話の場の雰囲気をもたらし、会話を柔らかくするという戦略的な使い方。 ②「はっきり言えないが、あえて言うとかんな理由だろう」という優位性を示さない、威圧的な態度を取らないスタンス。 ③「自分の意見はこうであるが、ほかの話し手によって変える余地がある」という排他的ではない発話の立場。
聞き手との関与	終助詞「ネ」との呼応を通して、前の話し手(もしくは、聞き手)と立場(スタンス)を揃える。

4.3 文中の「なんか」について

次に、文中に現れる「なんか」の例を挙げて分析する。

(7) [T015-008a] (抜粋)

((床屋で中学の同級生の理髪師に散髪してもらいながら雑談している。))

01 IC01_小川 あんまりこう(Dガ)なんてゆうよく
はっきりはわかんないんだけど=

02 IC02_正裕 =うーん。

03→IC01_小川 (0.1) でもなんかちょっとこうなんてゆうの

04 IC01_小川 (0.2) 力強さが無いっ

てゆうか [こう。

05 IC02_正裕 [あー。

06 IC01_小川 うん。(1.1) 声に張りが無いってゆうか。

(7) は、床屋で中学の同級生と雑談している場面での会話である。二人は友人が白血病にかかった話をしている。小川はその友人の最近の体調に関して話している。この会話において小川は、友人の容態について、「なんというのかははっきりわからないけど」(01、03)、「力強さがない感じ」(04) という話し手の印象を述べるとき、「なんか」を付けている。

このときの「なんか」は、「でも」に後続して発話中に現れている。「でも」は、本来逆接を表す接続詞である。しかし、「なんてゆうよくははっきりわかんないんだけど」(01) という前文と、「なんかちょっとこうなんてゆうの (0.2) 力強さがないってゆうかこう」(03~04) という後文は、実質的な事象事態のレベルにおける逆接というより、メタ言語的レベルにおける対照を形成している。つまり、友人の体調の具合について「どのように言えばいいのか分からない」というのが前件であり、後件の「力強さがない」という表現で言語のレベルにおいて前件の結果に反する内容を導いている。

ただし、「力強さはない」という意見を述べるとき、話者は「なんか」を付け足し、さらには「ちょっとこうなんていうの」とまで付け加え、言いにくい態度を示している。要するに、友人が死ぬかもしれないという重大なことに直接接触することは簡単にはできないため、「なんか」によってこれから触れる話に対して言葉の調節を試みているとみられる。とりわけ、「でも」との連なりに関して、「でも」の後半は情報内容の焦点として注目されるが、「なんか」の付け足しがあることによって、話し手の「何か言いたいのだが、言葉でははっきり言えない、もしくははっきり言ってしまおうとつらい思いをする」という内心の葛藤がとらえられるのである。言い換えると、「でもなんか」は、何らかの重苦しい話題について、触れたいが気軽に触れることはできない、もしくは触れにくいときに用いられる緩衝材のようなものである。「でもなんか」を用いるときは、話者の直言できないという迷いを示している。話者のこのような言いよどみは、微妙な問題に対する触れにくい、慎んでいるという態度(スタンス)を示している。

一方、聞き手との関与からみると、「でもなんか」は「なんか言おうと思っているけど、うまく言えない」というメタ的な情報が聞き手に伝えられている。このようなメタ的情報により、聞き手はこれから言われる話しに対してある程度の心構えや予測ができる。そのため、これからの話がたとえ深刻なものであろうとも、また、つらいものであろうとも、受け止めやすくなる。明るくない話でも落ち着いて最後まで聞くことができるのである。

発話の文中に現れる「なんか」について、下記の(8)の例を用いて考察を続ける。

(8) [T015-008a] (抜粋)

((床屋で中学の同級生の理髪師に散髪してもらいながら雑談している。))

255 IC02_正裕 いや。最近なの？。

257→IC01_小川 そう。だから 前になんかさ [あの：

259 IC02_正裕 [うん。

260 IC01_小川 吉井先生とかと飲んだ時があって

261 IC02_正裕 うん。

262 IC01_小川 (0.3) その時俺呼ばれたんだけど。

@ (吉井先生は中学時代の先生) 行けなかったんだよ =

(8) の会話場面は、(7) と同じで、小川が友人の容態について話した後の会話である。「なんか」は「なんかさあの：」という連なりで出現している。そして、その前に「だから」という接続詞で文を開始している。まず、「だから」は接続詞として、前件と後件の間の論理関係を表すものであるが、ここでは言語的な情報としての前件がない状態において用いられている。正裕が小川の話した友人の容態について「いや、最近なの」(255) と聞くと、小川は「だから」を用いて吉井先生との飲み会の話をし始める。ここの「だから」は、確かに友人の容態がよくないという共有情報を踏まえているが、そのままその情報を前件にして「友人の具合が悪い。だから、一年前に吉井先生と飲んだ時にすでに白血病だと分かっていたと言っていた」² と見るのは不適切である。発話(257)は、1年前吉井先生と飲んだ時にすでに白血病だと分かっていたので、今の憔悴した姿は予想内のことだということを示しているのである。つまり、この「だから」の使用条件は、「予測していたことが目の前で現実になった」という共通の理解があり、それを踏まえて(気分的には、「思ったとおりだ。一年前吉井先生と飲んだ時にはすでに病気だと分かっていたので、こうなるのも予測内のことである」という話者の認識があって)、「だから」となるわけである(加藤 2004: 230)。

よって、「だから」をもって文を開始する話者は《マウントをとる》³、《上から目線》、《傲慢》などのような印象を与えやすいのである。一方、「なんか」は、話者のためらいをにおわせている。話者は発話の途中で「なんかさ あの：」を追加し、これから触れることに対して言葉遣いの調整を試みている。言い換えると、「だから前になんかさ あの：」という文において、「なんか」は、「どのように言えば適切なのか」という話者の慎んだ態度を表している。それによって、「だから」の強迫的口調が和らぎ、「マウントをとらない」、もしくは優位性をとらないスタンスを示すことができる。いわゆる、「なんか」は「だから」の傲慢な口調を調整 (adjustment) するのに役立つのである。それによって、話し手と聞き手との間のコミュニケーションが柔らかい雰囲気に進むことができるようになる。

また、「なんか」は伝達上重要な意味をもたないが、間をもたせることで話者が考える時間を確保でき、フィラー (filler) に近い作用ももっている。「なんかさ あの：」という発話は、話者が構文を考えるための時間を確保しているのもある。この時、「なんか」は《ぼかし》という意味が強く前面に出ておらず、「あのう、なんかね」「うーうん、なんかさ」のように明確な意味をもたないが、言葉のすきまを埋めるために存在している。話者はすぐに本題に入らず、意味のない言葉で間をもたせることにより、話のスピードを落とし、張り詰めた雰囲気を緩和しているのである。

² 背景としては、「一年前に吉井先生との飲み会があった→その席で、友人(現在様態が悪い友人)は白血病になったことが分かっていたと言っていた→小川は飲み会に参加できなかったが、他の参加者から、その友人がそう言っていたということを知った→その友人がこの間小川の会社に突然来て、調子が悪かったと小川に言った→小川はそのことを、この会話の前の時期に正裕に伝えていた」とのようになっている。後半の会話データは長く込み入っているため省略する。

³ 《マウントをとる》とは、マウンティングとも言われる。「『自分の方は立場が上』と思いたくて、言葉や態度で自分の優位性を誇示してしまうこと」(瀧波・犬山 2014: 9) という意味を指す。マウンティング行為に関する研究には、市川 (2019) などがみられる。

フィラーとしての用法は、もちろん文中に限らない。文頭において、「なんかさ、あのう」と言って発話を開始することもある。ただし、文頭に置かれる場合は、聞き手と話し手との間の会話のチャンネルがすでに開かれているという状況文脈があるのが前提である。よって、聞き手と話し手が見知らぬ関係の場合、つまり聞き手と話し手が今日初めて会って、それまで一度も会話をしたことがない場合は、「なんかさ」で会話を始めることは想定しにくいのである。一方、「なんか」で発話を始める場合は、明らかに聞き手の注意を引き、話を聞いてもらえるように誘っているという話し手の姿勢がうかがえる。また、発話中に間をもたせたり考えたりすることは、これから難しい話題または言いにくい話題に入ることを示す。(8)では、友人が病気にかかったということは重苦しい話題であり、平然な顔で心地よく話すことはできないという話者の態度が見て取れる。

さらに、聞き手との関与の面から見ると、「だから前になんかさ あの：」は、話し手がこれから言及することは大事なこともかもしれないということを予告する。そこで、聞き手は話を真剣に聞く準備をするのである。また、聞き手は、話し手の慎重な態度を見て、これから語られる話は快く聞けるものではない、もしくは深刻な問題である可能性があるとして一定程度予測できる。そのような心の準備ができたうえで話を聞いたほうが聞き手としても受け取りやすいであろう。

上記 (7)～(8) の分析を踏まえ、発話中の「なんか」について、下記表3にまとめる。

表3. 文中の「なんか」について

話者の立場	スタンスとその作用
話し手自身	伝達上の意味をもたないが、フィラーのように間をもたせ、考える時間を確保するために用いられる。
	「でも」、「だから」などの談話標識と連なって用いられ、口調を調整し、マウントをとらないスタンスをもって対応する。
	微妙な問題に対して慎んでいる態度を示す。
	堅苦しい雰囲気を柔らかくする。
聞き手との関与 (または聞き手の 視点から)	言及される話題は何なのか、聞き手の興味を引き付ける。
	言及される話題の性質を予測でき、心の準備をしたうえで話を聞くため、受け止めやすい。

5. 「なんか」と拡張的交感機能との関係

4節では、文頭・文末・文中に現れる「なんか」に対して、話し手および聞き手の視点から分析を行った。各々の会話に基づいて、各位置に現れた「なんか」を考察したが、量的研究を行っていないため、「なんか」が表したスタンスが全て記しているとは言い切れない。ただ、各位置に現れる「なんか」の用い方を一定程度、窺うことはできるだろう。

要点を述べると、話し手の視点から見た場合、文頭、文末、文中における「なんか」は「マウントをとらない姿勢をとり、会話の雰囲気を柔らかくする」「微妙な問題を扱うときに慎重な態度を示す」という共通点をもっている。そのほか、文頭・文中における「なんか」は、フィラーのように間をもたせ、考える時間を確保するために用いられる傾向がある。それに対して、文末における「なんか」は、言いさし文になり、話し手は会話の主導権を握ることができる。一方、聞き手との関与から見た場合、文頭の「なんか」は、聞き手の興味を引き付け、自分の立場を聞き手と揃えるために用いられるものもみられる。文末の「なんか」は、言いさし文の用法をもち、聞き手のネガティブ・フェイスが守られる。そして、文中の「なんか」は、フィラーとして

用いられるとき、聞き手の関心呼び起こし、聞き手が言及される話題の性質を予測できるという作用をもつことを指摘した。

加えて、モダリティの観点からみると、談話標識の大半は心的態度を表すものであり、「たぶん」「もしかしたら」などは直接モダリティと関わっている。「なんか」も、「なんかだろう」「なんかかもしれない」などいろいろなもの結びつき、「断言ではない」というモダリティの機能としてとらえられやすい。しかし、「なんか」自体は、特定の可能性や見込みを直接表すというより、「断言しないで話をしている」というスタンスを表している。言い換えると、「断言するかどうか」というより、「断言しない言い方をするよ」「断言しない言い方で話にのぞむよ」という姿勢を聞き手に表明している。これにより、話者の《マウントをとらない、優位性を示さない》というスタンスが保たれるのである。すなわち、「なんか」はモダリティを直接表すというより、モダリティに関して話者がどのように思っているのか（モダリティの使い方）を表すものである。モダリティをどう扱うのかというものであるため、〈メタ的モダリティ〉とも言えるだろう。表にまとめると、次のようになる。

表4. 会話全体における「なんか」について

話者と聴者	発話における位置	スタンスとその作用（メタ的モダリティ）
話し手自身	文頭・文中・文末	①マウントをとらない姿勢をとり、会話の雰囲気柔らかくする。 ②微妙な問題を扱うときに慎ましい態度を示す。
	文頭・文中	フィラーとして、間をもたせ、考える時間を確保する。
	文末	言いさしとして、会話の主導権を握ることができる。
	聞き手との関与	文頭
文中		①フィラーとして用いられるとき、会話に対する聞き手の関心呼び起こす。 ②言及される話題の性質を予測し、心の準備ができたうえで話を聞くことができる。
文末		言いさし文の用法をもち、聞き手の自由を狭めず、ネガティブ・ボライトネスにつながる。

3節で述べたように、拡張的交感機能は、相手との心理的接触を考慮しながら情報伝達をする際に、メタレベルで働いているものである。つまり、会話中の情報伝達の際に穏やかな会話環境を確保するためにメタ的に交感機能を果たしているのである。表4にまとめた「なんか」の具体的な作用から、その別の層で交感機能の働きがみられる。話し手としては、マウントをとらない（優位性を示さない）姿勢で対応し、会話の雰囲気柔らかくするように取り組み、デリケートな問題に直面したときに慎んだ態度（適切な言葉遣いや言い方をするように努力すること）をとるなど、聞き手との心理的接触を考慮しているのである。また、フィラーとして働くのは、話し手の考える時間をとるためであるが、聞き手の関心を引き起こし、聞き手は心の準備をしたうえで話を聞くことができるようになる。さらに、言いさしとして用いられる場合は、聞き手は前の話し手から発話の順番をとるかどうかの自由が与えられる。聞き手が発話の順番をとらない場合、話し手は沈黙が生じないように話を続けることができる。このように、「なんか」は、会話を促進または円滑に運ぶために働いているのである。このような作用は交感機能の役割をもっていると考えられる。要するに、交感機能は単なる会話の開始部・終結部におけるあいさつ言葉に

限定されるものではない。会話の本題においても、話者同士が協力し合って会話を運ぶため、メタレベルにおいて交感機能を果たしているのである。本研究では、このような交感機能を拡張的交感機能（会話進行中の調整）とする。

6. 結論と残された問題

本研究は、「なんか」を例として談話標識がいかにして会話において拡張的交感機能を果たしているのかについて考察した。談話標識として用いられる「なんか」は、発話中だけでなく、発話頭と発話末にも出現することがみられる。また、本研究は、話し手と聞き手それぞれの立場から「なんか」が表したスタンスおよびその作用を分析した。話し手の立場から見ると、「なんか」はマウントをとらない（優位性を示さない）姿勢を示し、会話の雰囲気や柔軟性を高め、デリケートな問題に直面したときに慎んだ態度（適切な言葉遣いや言い方をとるように努力すること）をとるなど、聞き手との心理的接触を考慮しているのである。さらに、発話頭・発話中は主にフィルターとして用いられ、発話末には言いつきの用法がみられる。そのほか、聞き手との関与においては、フィルターとして用いられるとき、聞き手の興味・関心が引き起こされ、聞き手は言及される話題の性質を予測でき、心の準備をしたうえで話を聞くことができる。加えて、言いつきの言い方になる場合、聞き手には発話の順番をとるかどうかを決定する自由が与えられている。それと同時に、話し手も会話の進捗を制御でき、沈黙が生じないように円滑に会話を進めることができる。よって、本研究が明らかにした「なんか」の働きは、会話の進行の調節の役割を担う作用を有していることから、話し手と聞き手の心理的接触に焦点を合わせた拡張的交感機能の解明につながるものである。

つまるところ、「断言しないで話を進める」姿勢は、交感機能におけるコミュニケーションの環境を作ることに当てはまる。もっとも、「なんか」自体は交感機能を中心に果たすものではないが、「なんか」の使用によって、会話における話者同士の対立的な関係を避け、柔らかい雰囲気で会話を進めることができるようになる。よって、あいさつなどは直接的に交感機能を果たし、「なんか」のような談話標識は間接的にその役割を果たしている、もしくは二次的交感機能とも言えるであろう。このように、交感機能は、単なる会話の開始部や終結部に働くのではなく、会話中の発話に談話標識などの言語要素を通して拡張的に果たしているところもあると明らかになった。本研究は、拡張的交感機能の説明の一助になると考えられる。今後の課題としては、談話標識において、「なんか」のような、話し手のスタンスを示す拡張的交感機能を果たす短い表現がまだほかにもあるのかについて考察したい。また、今回は余裕がなかったが、日本語に存在する、他の類似の談話標識との違いの記述も必要である。今後、他の類似の作用を持つ形式との比較研究を行い、日本語の談話規則の理論的な考察をさらに深めたい。

参考文献

- Du Bois, John W. (2007) The Stance Triangle. In Robert Englebretson(ed.) *Stancetaking in Discourse*, 139-182. Jhon Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.
- Firth, J. R. (1964) Context of situation. *The Tongues of Men and Speech*. In R. Mackin and P. D. Stevens (eds), *Language and Language Learning*, 110-114. London: Oxford University Press.
- 平本 毅 (2011) 「発話ターン開始部に置かれる『なんか』の話者性の『弱さ』について」『社会言語科学』14 (1)、198-209.
- 市川真未 (2019) 「マウンティングの特徴について—ポライトネスの原理から」『日本語日本文学』29、

59-67.

- 飯尾牧子 (2006) 「短大生の話し言葉にみる談話標識『なんか』の一考察」『東洋女子短期大学紀要』38、67-77.
- Jakobson, R. (1960) *Linguistics and Poetics*. In Thomas A. Sebeok(ed.) *Style in Language*, 350-377. New York: John Wiley and Sons (邦訳: ロマーン・ヤーコブソン (1973) 言語学と詩学 一般言語学 川本茂雄監修、田村すゝ子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子 (訳)、183-221、みすず書房).
- 加藤重広 (2004) 『日本語語用論のしくみ』東京: 研究社.
- Malinowski, B. (1923 [1972]) *Phatic Communion*. In: John Laver and Sandy Hutcheson (eds.) *Communication in Face to Face Interaction, Selected Readings*, 146-152. Great Britain: Penguin Books.
- 町田 健 (2021) 『日本語文法総解説』東京: 研究社.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法5 第9部とりたて 第10部主題』東京: くろしお出版.
- 小野寺典子 (2020) 「メタ語用論」、加藤重広・澤田淳 (編) 『はじめての語用論—基礎から応用まで』177-193、東京: 研究社.
- ルカムト、ユリアナルジュキ (2012) 「談話標識『なんか』について—日本語教育における観点から—」『日本語・日本文化研究』22、95-108.
- Sacks, H., Schegloff, E. and Jefferson, G. (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. *Language* 50, 696-735.
- Schiffrin, D. (1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Saito, Makiko (1992) A Study of the Discourse Marker *Nanka* in Japanese. MA Thesis, Michigan State University.
- 瀧波ユカリ・犬山紙子 (2014) 『女は笑顔で殴りあう マウンティング女子の実態』東京: 筑摩書房. (2017年刊『マウンティング女子の世界: 女は笑顔で殴りあう』とのように改題した).
- 楊 雯淇 (2017) 「手続き的意味による日本語談話標識『なんか』の分析」『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学ジャーナル』24、57-74.

(シヨウ ケツ・中国海南大学博士研究員)